

生命理解のための動物の「飼育」と「観察」 ~平成30年度第1回現職教育~

年度当初です。忙しいのは忙しいのですが、やはり6月に公開がないと「少し」ゆとりがあるようにも感じています。

117名の新入生を迎えた第52回入学式を無事終えた午後、校長先生のコーディネートで柴生先生、川名先生、生活科部と3年生副主任の遠藤先生と一緒に大学に齊藤千映美先生を訪ねました。

校長先生の思いは任期の最終年度にあたって、大学の様々な先生方と附属小の先生方の接点をできるだけ作ってあげたい、というところにあります。

今回、齊藤先生にお願いしたのは、先生が大学でヤギの飼育に関わっていることにあります。そのヤギですが、今では宮教大のシンボリックな役割も果たしています。

また、もう1つの理由は、現在の附属小の上杉キャンパスが生活科創世記（昭和後期～平成初期）と比較すると「学習材」があまりにも少なくなっていることにあります。例えば水田。以前はプール脇に水田があって、2年生、5年生の絶好の学習場所でした。連休明けには田植えを開始し、6月にはカエルの声が響きます。収穫までの管理は大変ですが、それだけ収穫の喜びも格別でした。また裏の畑（今は半分駐車場）。小麦や大豆などの栽培が盛んでした。小麦は2年生でパン作り、大豆は5年生の総合に発展していきました。

作物の栽培だけでなくチャボなどの飼育も盛んで、飼育委員会の子どもたちが中心になって育て続けていました。栽培活動や飼育活動は生活科だけでなく、命を育て、友達と協力して取り組むことの大切さを学ぶ大切な機会でもありました。

一方、この間、鳥インフルエンザの影響やO157、そして東日本大震災などの影響で、附属小だけでなく小学校で食物を栽培することや生き物を飼育することが敬遠されるようにもなりました。

ヤギと触れ合う前に、齊藤先生から生命理解のための動物の飼育と観察というテーマでお話をいただきました。お話の中では、学校での動物の飼育の現状や動物の飼育を通して学ぶことができることなど、私たち小学校教員にとって興味深いお話をたくさん伺うことができました。今回の現職教育はここに大きなねらいがありました。

「ヤギと触れ合うまでは多くの方に賛同を得るのですが、飼育となると学校として取り組まないと続きません。」という齊藤先生のお話が印象的でした。

今回の研修は、生活科の原点や体験の大切さを知る意味で貴重な時間となりました。低学年の理科、社会が廃止され、生活科が始まってから今年で30年。もう1度生活科創成期の思いや願いに立ち戻ったとき、今の附属小の子どもたちに何が大切かを考えることにつながるように思います。

